

東京都知事選から総裁選、総選挙へ 2024 無党派層をめぐる選挙と 政治の行方

遠藤 晶久 早稲田大学社会科学総合学院教授
大串 博志 衆議院議員・立憲民主党選挙対策委員長
久米 晃 選挙・政治アドバイザー・元自由民主党党本部事務局長
山口 二郎 法政大学法学部教授〔司会〕

2024年7月投開票の東京都知事選は、現職の小池百合子知事が3選を果たした。現職の強さとともに、注目を集めたのは、参議院議員を辞職、立憲民主党も離党し、小池氏との一騎打ちに臨んだ蓮舫氏が得票数で3位に終わったことだった。代わって、東京都では無名の前広島県安芸高田市市長の石丸伸二氏が2位に浮上。YouTube動画を駆使して改革イメージを拡散、東京都以外の無党派層や無関心と思われた若い世代に食い込む「石丸現象」は既成政党を脅かした。

一方、自民党・岸田政権は旧統一教会との癒着問題、政治資金の裏金問題への対応で、後手後手に回った。内閣支持率が低迷する中、自民党は衆議院議員や参院議員の補欠選挙、政党対決型の知事選、都議補選で、敗北を重ねた。支持率回復のめどが立たないまま、岸田首相は8月、自民党総裁選への不出馬表明に追い込まれた。

政局の歯車は回り、9月には次の内閣総理大臣を決める、自民党総裁選が行われる。自民党の

支持率低迷を背景に政権交代を実現したい野党第1党、立憲民主党の代表選挙も行われる。自民党新総裁は、首相として、年内にも衆院解散、総選挙に臨むことが、規定路線とみられている。

政治不信と支持率低迷の中で、なお自民党中心の政権が続くとすれば、与野党の責任はともに重い。「石丸現象」は今後、有権者の投票行動や選挙のありかたにどんな影響をもたらすのか。政党、政治家は有権者、とりわけ無党派層にどうアプローチしていくのか。政権交代の着火点はあるのか。

自民党で長く選挙に携わってきた「選挙・政治アドバイザー」の久米晃氏、流動化する有権者の投票行動を分析する早稲田大学教授の遠藤晶久氏、衆議院議員(佐賀2区、当選6回)で立憲民主党選挙対策委員長の大串博志氏を迎えての座談会を開催した。司会は生活研理事、法政大学教授山口二郎氏が務めた。

(編集委員・萩原久美子)

総括・東京都知事選

立民・中道層にとどかず

山口 まず、立憲民主党の大串博志選挙対策委員長から、立憲民主党としての総括をお願いします。

大串 都知事選は、日本で一番大きな直接選挙です。現職が強い選挙に向けて決断してくれた蓮舫さん。その決断は貴重だった。この大きな都政を争う選挙で、本格的な候補と認めてもらえる。そういう人は蓮舫さん以外に出せなかった。蓮舫さん以外で戦うっていうのは、私はなかったと思う。正直言って、非常に厳しい戦いだとわかっていましたが、戦うしかなかったと思います。

小池百合子さんは2016年7月、都知事に立候補し、2期務めた現職です。現職は強いというのは定説ですが、戦い方の工夫が足りなかった。もつとよく戦えたところはあると思う。

まず、私達は、中道路線、真ん中のところを取りに行かなければならなかった。自民党に対する批判も非常に多い中、野党第一党としての存在感を示さなければならなかった。小池さんは、初出馬の時、「東京都議会自民党の闇を暴く」といっていたが、だんだん自民党と近くなっていった。野党第1党として、選択肢を示すことは必須だった。都知事選なので、争点の設定が非常に重要だったが、改善の余地があるものにとどまった。

次に、戦い方—SNS、インターネットの使い方。その点で、石丸伸二候補の伸びを許した。もちろん、街頭活動、リアルな活動のあり方も、考える余地があった。

山口 共産党との共闘が敗因ではないかという話もある。私が疑問を持ったのは、候補者選考委員会が何か1967年の美濃部都政を作った知識人の集まりのようだったことだ。社会党と共産党の「社共共闘」、それを今で言えば立憲、共産の共闘でやれば勝てる、みたいな感覚で、都知事選挙に臨んで態勢をつくったという印象を持った。私自身、

野党共闘を最初に言い出した人間だが、今は限界も感じている。野党共闘について、どう評価しているのですか。

大串 共産党がぐっと前に出てきたことで真ん中の層の離脱を招いたのではないかという声があるが、蓮舫さんは、無所属の候補として、あえて出馬した。それは幅広い支援を得たい、党派を超えて応援していただきたいということだった。そういう中で共産党をはじめ、応援してくれる人たちが自らの支持を固めていくことは当然のことだ。ただ、私達、立憲民主党として、取れる層、中道、真ん中の層に対する働きかけという点での反省はある。

やはり石丸現象

山口 遠藤晶久さんは、選挙分析の専門家として、今回の都知事選挙の特徴どういうふうにまとめてますか。投票率が久しぶりに60%を超えました。

遠藤 候補者が非常に多く、泡沫と言われる、本当に勝つ気はない人たちが大量に候補者になった選挙でした。その部分が投票率に影響した部分もあったかもしれませんが、石丸さんがかなり新しい層を動員したと思います。やはり今回の選挙の特徴は「石丸現象」です。石丸候補が2位になったことが一番の特徴となった選挙だった。

東京都知事選は、直接選挙、非常に大きな選挙です。一方、チャレンジャーにとって、非常に難しい選挙でもある。まず、争点設定が非常にしづらいという特徴がある。たとえば、現職がすでになりのバラマキ政策をやっている中で、チャレンジャーがさらにそれ以上のバラマキ政策を言いだしづらい。かといって、神宮外苑の森の伐採は重要な話だが、それを前面に出しても都政、東京都民全体にとっては一部にしかすぎない。

さらに、現職が勝つという見通しの中で、2位については、有権者が自分たちの批判的な思い、おもしろいと思った人を推すような投票行動に出る環境ができました。そういう形で自分たちの票を使う人がかなりいた結果、蓮舫さんの票を上回った。蓮舫さんは民主党政権時代の閣僚から始まって、



山口 二郎

法政大学法学部教授・生活研理事

〈やまぐち じろう〉東京大学法学部卒業。オックスフォード大学セントアントニーズ・カレッジ客員研究員、北海道大学教授等を経て2014年より現職。

著書に『民主主義は終わるのか—瀬戸際に立つ日本』（岩波書店）、『民主主義へのオデッセイ—私の同時代政治史』（岩波書店）など。



大串 博志

衆議院議員・立憲民主党選挙対策委員長

〈おおぐし ひろし〉小選挙区（佐賀県第二区）選出（当選6回）。東京大学法学部卒業、米国UCLA経営学修士。

財務大臣政務官、内閣府大臣政務官、復興大臣政務官、内閣総理大臣補佐官等を歴任。

長いキャリアがあるため、逆に既存の政治の側の人として攻撃される側に回ってしまった。

ずっと長く国政の顔でやってきた人が「この都知事選にすごく準備してきました」という感じで出てくれば「さすがだ」となったかもしれない。けれども、なかなか公約も出ず、ほぼ準備がなかったことも不振につながったのではないかな。

空振りに終わった「反自民」

山口 久米さん、自民党側は今回の都知事選挙で何をしていたのですか。

久米 自民党支持層は、世論調査で見ると、大体7、8割は、小池さんに入れていますよね。結局、選択肢は小池さんしかなかった。しかし、自民党的に言えば、必ずしも小池さんを推薦しているわけじゃない。これまでも何回何回も、煮え湯を飲まされてきたわけだから。東京都の役人の間でも、「小池さんも嫌だけど、蓮舫さん、もっと嫌だよな」という声もあって、いわば嫌われ者の選択みたいところ

があった。

こうしたことを選挙の構図として気づくべきだったのに、蓮舫さんは「反自民」「反小池」という政党対決に持ち込もうとした。そこは大失敗だ。結局、政党は推薦ではなく、みんな小池さんの「確認団体」の中に入っちゃった。だから蓮舫さんは最初から、空振りしちゃいました。本当だったら、「小池さんが何をやってきたんだ」ということを争点にしなければならなかった。なのに、最初に反自民って言っちゃうから、だめなんです。

しかも、そこに共産党でしょ。共産党が推薦したら、早速、共産党のビラに蓮舫さんが載った。僕は赤旗の記者に「これじゃ、共産党が蓮舫さんを担いだみたいなるでしょ」と言いました。

一方、石丸さんは、YouTubeやSNSだけで支持を上げたのではないと思ってます。日本記者クラブが候補者討論会で、50人以上の立候補者から小池、蓮舫、田母神、石丸の4人だけに絞っちゃった。この4人を全く同列に取り扱った。あれがやっぱりすごく大きかった。あのテレビ報道、新聞



久米 晃

選挙・政治アドバイザー
元自由民主党党本部事務局長

〈くめ あきら〉。業界紙記者を経て、1980年に自民党本部職員。党選対本部事務部長などを歴任し、2019年に退職。



遠藤 晶久

早稲田大学社会科学総合学院教授

〈えんどう まさひさ〉早稲田大学政治学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（政治学）、早稲田大学政治経済学術院助手、高知大学人文学部講師等を経て現職。著書に『熟議の効用、熟議の効果—政治哲学を実証する』（勁草書房）、『イデオロギーと日本政治—世代で異なる「保守」と「革新」』（新泉社）など。

報道が、石丸さんの候補者としての位置を確定し、YouTubeなんかも連動したんだと思ってます。

大串 久米さんがおっしゃったように、対自民党、対小池という枠組みをはめようとしたが、うまくヒットするものでなかった。反省点かなと思う。

久米 この炎天下で、20分か30分、しゃべってね。聴衆を立たしてね。出てくる人が、立憲民主党の役員だったり、例えば共産党の志位和夫前委員長だったり、そんなのが出てきたら、駄目でしょ。こんなに、暑いんだから演説は5分で終わりって、そのぐらいのこと言ってもよかった。

遠藤 蓮舫さんがもったいなかったのは、離党したのに、政党が抱え込んで、政党関係者以外と話していない印象を持たれたこと。しかも蓮舫さん自身がこれまでとは違う人たちと話していろんなところを回っていれば、「彼女はいろんな人の話聞くんだ」「国会議員だったこれまでとはちょっと違うんだ」という形になれた。そうすれば、もう少し票を伸ばしたと思います。

山口 現場で頑張っている人たちを掘り起こして、

つながりを作る。そういう形の運動はできなかったところがありますね。

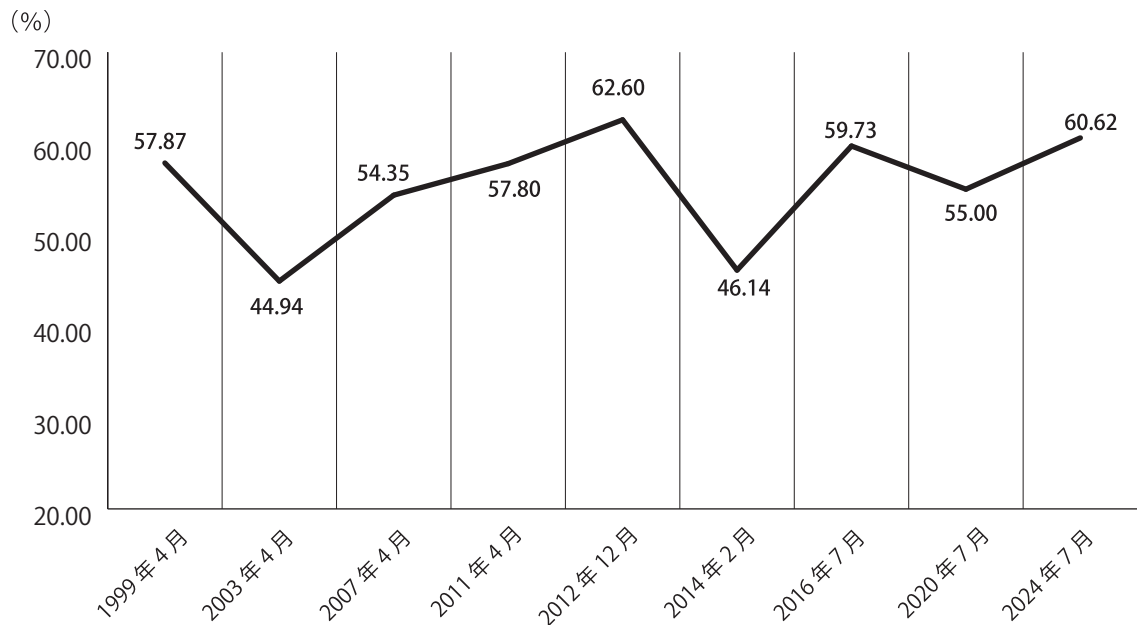
石丸現象は総選挙でも？

山口 石丸さんの大量得票をどう分析していますか。

遠藤 政治不信が高まっている時期に、都知事選がぶつかったのが大きかった。裏金問題があつて自民党に対し、非常に不満があつた。その中で誰にしようかとなったときに、ネット上で、石丸さんは非常に歯切れも良くて「今までとは違いそうだ」という、ある種の改革シンボルみたいなイメージを打ち出していった。それが期待感に繋がった。

支持したのは、常に政治についてよく考えているとか、よく知っている人たちというわけではなさそうだ。若いといっても、20代だけでなかった。30代、40代の、普段は政治とは距離を取りたいと思っている層からも、かなりの得票が出てきた。

山口 石丸さんは政策については何も言わない。



出所：東京都選挙管理委員会

争点があるとなれば、世代間の対立、既得権層の打破だと。そういう形で若者を掘り起こすのは新しい現象だったと思う。今後の選挙にも、この現象は継続していくのだろうか。

遠藤 都知事選は、特殊な選挙です。首長を選ぶ非常に大きい直接投票の選挙だ。国政とは違う。石丸現象は国政レベルでは難しいのではないかな。一人でやればいいというのとは違って、仲間を作って、同じような人を一定の塊で抱えてやっていくことになる。その場合でも、2、3人では難しい。

やっぱり今回は一つのサプライズではあったが、政策も政治姿勢もよくわからないけれど、票を集めたという段階から、次は「石丸さんは何を言うのだろうか」と精査が始まる段階に入る。精査をしない人たちの票は、繋ぎ止められるかもしれないが、批判する人たち、支持をやめる人たちも出てくる。学生に石丸現象について聞くと、「最初は、いいなと思ったが、いろいろ自分で調べると、ちょっと支持できないと思いました」と変わっていった。

山口 たくさんの政治家を見てこられた久米さんは、石丸さんを新しいと感じましたか。小泉純一郎、橋下徹といった、無党派層に浸透していく政治家になると思いますか。

久米 石丸さんには「これから何をしよう」という

メッセージは何もなかった。例えば、次は国政目指すとか、政党を作るといったものではなく、漠然と運動をやって、漠然と結果が出ただけだ。展望があつてやっているわけじゃない。小泉さんや、橋下さんとは、違う。一過性のものだ。

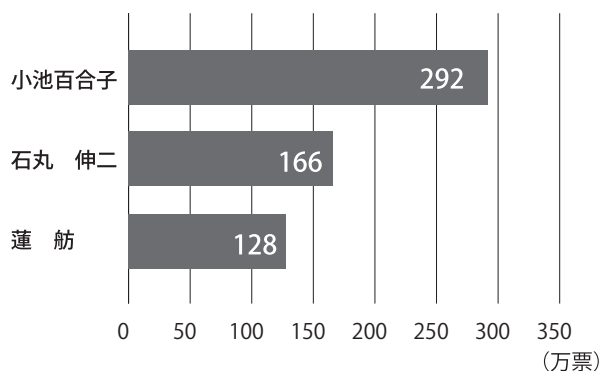
インターネット選挙運動の戦略

山口 大串さんは、ショックだったのでは。

大串 反省点はたくさんある。SNSの使い方、石丸氏は今回、ギュッと伸びた。立憲民主はこれまで、インターネット発信のプラットフォームとしてX（旧ツイッター）、インスタグラム、Facebookで対応してきました。特にXのフォロワーが多かったので、Xを使う傾向があつたのです。ですが、その後の勉強会で、X、インスタ、Facebookは身内にぐるぐる回るようなアルゴリズムだということがわかってきた。一方、YouTubeとTikTokは、何らかの関心を持つ新しい人たちにリーチし、メッセージを届けるアルゴリズムを使っています。

その違いを前提とすると、今後は、YouTubeとTikTokとなる。ただ、TikTokは中国との関係がありますから、政治的な配慮はもちろん必要になります。いずれにせよ、YouTube、特にショート動画メッ

2024 東京都知事選得票数



出所：東京都選挙管理委員会

セージの届け方が重要になっており、ショートでなければ若い世代に訴求しなくなっている。

全選挙区の支部長、候補者も含めて、8月初旬に研修会をやりました。ショート動画などを使って、YouTubeを活用する方法は非常に、学ぶところがありました。党のプラットフォームも具体的にシフトさせようと思っています。

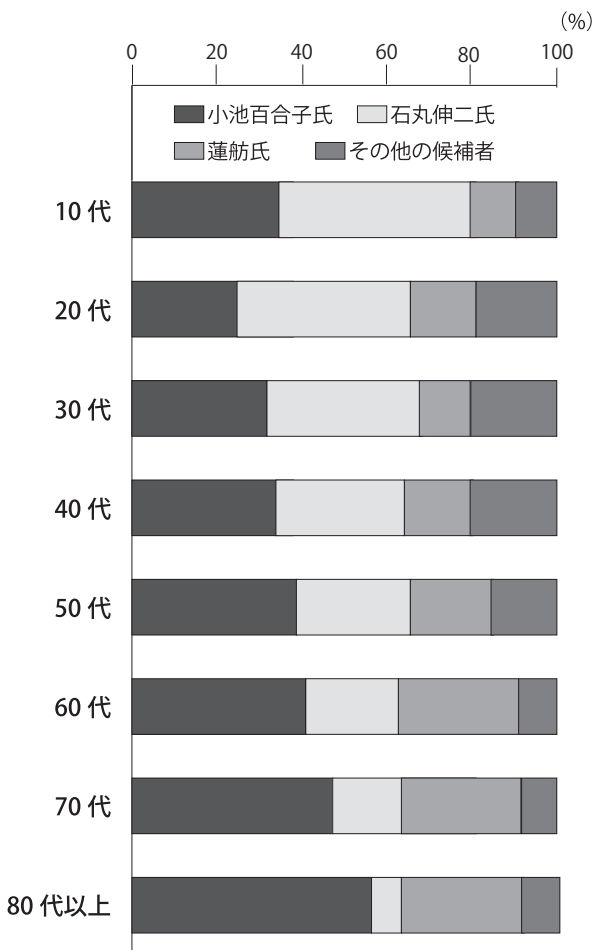
遠藤 確かに、Xやインスタグラムのフォロワー数では、石丸さんより、小池さんと蓮舫さんの方が多かった。けれども、石丸さんにYouTubeで圧倒的に差をつけられた。動画にどういふに結びつけ、誘導できるか。しかも短く、メッセージだけ乗せる。そこを石丸さん側は重視した。

もう一つ、指摘しておくべきことは、2013年にインターネット選挙運動が解禁された。しばらくは、期待されているほど使われなかったが、2020年のコロナ禍が画期となった。2020年の都知事選挙の時、人を集めてはいけない、演説するときにも、事前にアナウンスをして人を集めることもできない。だから全部ネットに上げる、というのが始まった。

候補者だけでなく、有権者の方もいろんな情報、政治的な情報をネットから取るということに慣れていった。ネットで探せばどこかにある、というのがわかり始めた。その相乗効果でネットでの選挙運動はかなり効果が出てくる。今回の教訓は、XとかSNSをとにかくやればいいということではなく、効果的なやり方があるということだ。

石丸さんはすごく戦略的にやったし、石丸さん本

東京都知事選・年代別の投票先 (出口調査)



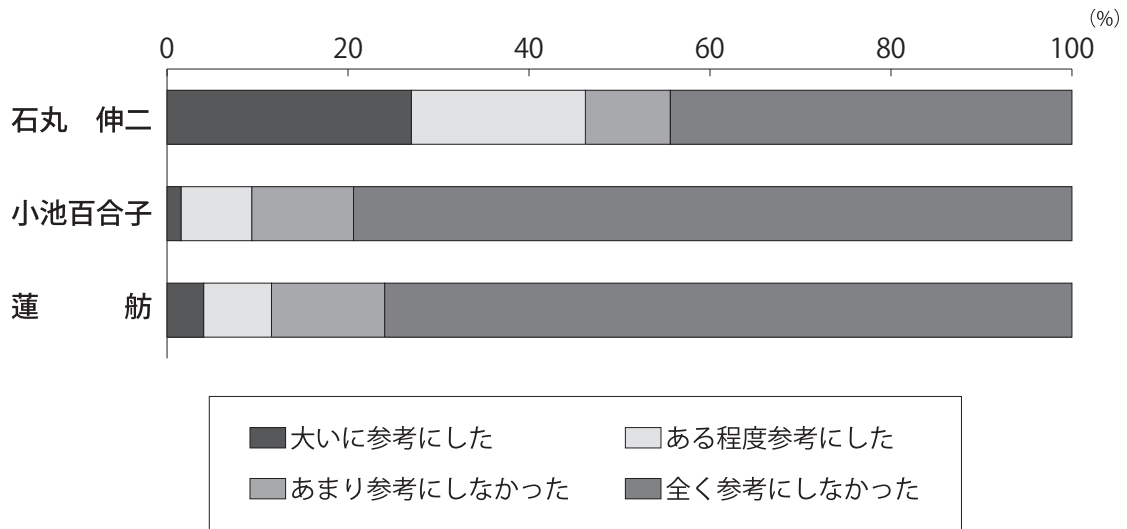
出所：共同通信社出口調査。

7月7日都内120カ所投票所、投票後の有権者5357人回答。

人がやらなくても周りが切り抜き動画を作る。しかも、その人たち自身が支持しているかどうかとは別にして、動画を挙げれば稼げるというアテンションエコノミーでは、その動きが増幅する。石丸側はそれを増幅させる戦略をとったのだと考えています。

大串 都知事選挙は、これだけ浮動票が多い無党派層が多い選挙なので、ネットが非常に大きなパワーを持つという選挙だと思います。しかし、次に待つのは衆院選です。都知事選挙とは選挙の内容が全然違う。衆議院選挙では、1つ1つの選挙区での日々の地道な活動の方が圧倒的に重要です。地道な活動をしている候補者であることをYouTubeなど使いながら知ってもらうことが必要です。もう1つは党を知ってもらうための広報です。党の名前を書いてもらう比例区の対策として、今回学んだYouTubeの活用を考えたいと思っています。

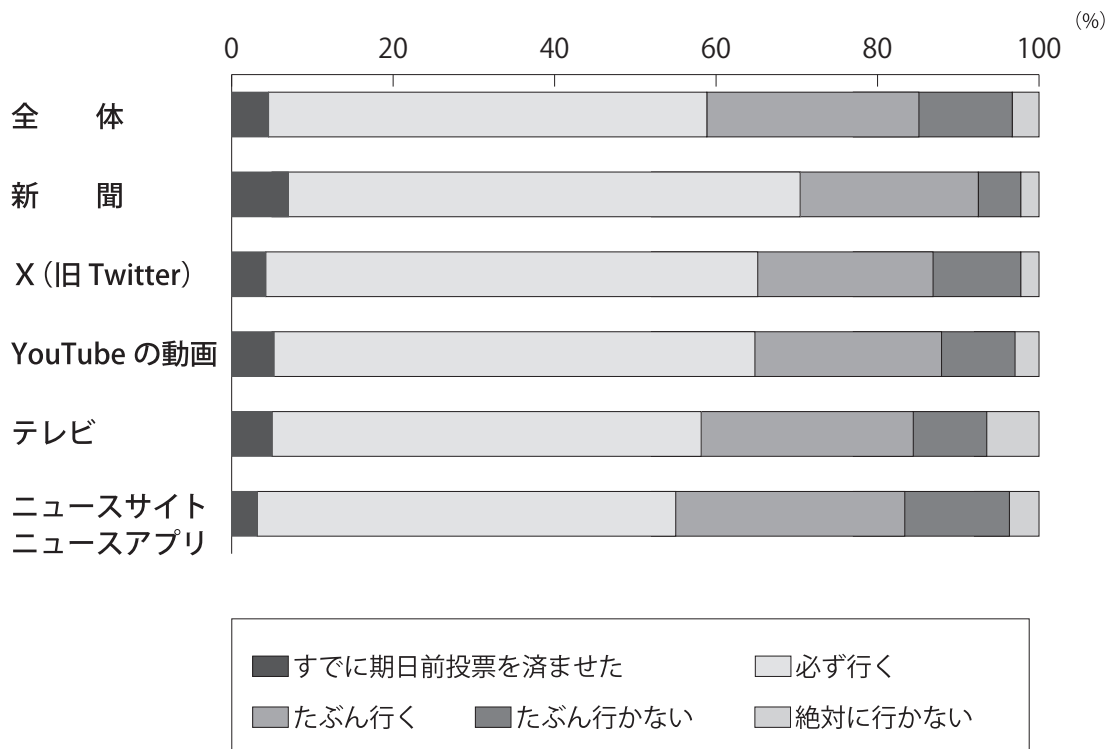
■候補者を支持するうえでYouTubeを参考にした？



出所:米重克洋「石丸現象とは何か 石丸伸二氏「165万票」の中身を独自データで分析する」(2024年7月8日 Yahoo!ニュース)
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/3445aa21db852501d2b183d327408c69f5046910>
 JX 通信 情勢調査分析(7月1日実施)

メディア別の投票意欲(投票意向)

■メディア別の投票意欲(投票意向) ※抜粋



出所:米重克洋「石丸現象とは何か 石丸伸二氏「165万票」の中身を独自データで分析する」(2024年7月8日 Yahoo!ニュース)
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/3445aa21db852501d2b183d327408c69f5046910>
 JX 通信 情勢調査分析(7月1日実施)

自民 逆風の中での総裁選

補選・政党対決では負けた自民

山口 2024年4月、東京15区、島根1区、長崎3区の3つの衆議院の補欠選挙で立憲民主党が勝ちました。風向きが変わったかに見えた。立憲民主党は自民党に飽きた人、有権者の受け皿になれるかなと思った瞬間があったのだが。

大串 5月末の静岡県知事選で推薦候補が勝ち、次は都知事選だと真正面から取り組んだが、至らなかった。ただ、蓮舫、石丸の両候補の得票数は合わせると小池さんを上回るぐらいだった。これは批判票、現状打破してほしいという声だと受け止めています。次の総選挙では自民党政治に不満を持つ有権者の選択肢、受け皿として認識してもらえ立ち位置に立憲民主党がつく。それが非常に大切だと考えている。

山口 どういう形で、何を言うのか。自民党に対抗する勢力を、立憲民主党を中心に、広く結集しているのか。すごく大きな宿題が残っているように思われます。一方、都議の補選では、自民党がさっぱり振るわなかった。久米さんはどのように受け止められているのか。

久米 都知事選挙は政党対決ではなかったが、都議の補選は政党対決の結果でしょう。10月に岩手で参院補選がある。これは不戦敗になるが、足元は深刻だと思います。「今、このご時世で『自民党を頼む』と言えたものではない」と多くの地方の市会議員、町会議員が言っています。これまで2回の政権交代がありましたが、「その時よりも、有権者の反応は深刻だ」と言っています。政党対決にしたら、こういう事態になっているのです。

総選挙で勝つための総裁選では続かない

山口 そこで岸田首相が退陣を表明し、自民党総

裁選となった。これまで自民党はピンチになると、総裁選をやり、新しい人をだして不人気を帳消しにするというリセット作戦で、政権を維持してきた。森喜朗さんの後の小泉純一郎さんしかり、菅義偉さんの後の岸田文雄さんしかり、です。だが、今回、自民党はそれができるのでしょうか。

久米 岸田さんは退陣せざるを得ない状況だった。岸田さんは総裁選に出て勝てない、もし総裁選で勝っても、衆院選で負けて、責任取らされる——。そういう状況で、いつ、総裁選挙辞退表明するのかをみんな見ている。だから、世論調査を見れば、岸田さんがやめると言った後、総裁選に向けていろんな人が手を挙げたことで、自民党の支持率は若干上がった。そこは効果があった。けれども、そこだけであって、これからが続かない、変わらないと思います。

それは次の総選挙で勝つための候補者選びをしているからです。総裁選は内閣総理大臣を選ぶ選挙なのに、この人こそ内閣総理大臣だという人が見当たらない。昔みたいに、「三角大福中」「安竹宮」と言われた時代とは違って、自民党の人材は払底してしまった。

山口 一番安定感がある、すぐにでも総理ができる人材ということであれば、林芳正官房長官でしょうか。齋藤健さんも非常に考えがしっかりした人で、実力はあるだろうと思う。ただ、有権者の顔色を見ている議員の皆さんからすれば、選挙の顔になる、もっと若い小泉進次郎、河野太郎の方がいいという声も強いのでしょうか。

久米 小泉進次郎さんの人気があることと、内閣総理大臣としての力量とは別の話です。環境大臣を1回やったぐらいで、国の運営、経営はできない。そう自民党の関係者も思っているが、国会議員の先生方はもう自分の選挙で勝つということだけ、という感じです。

国会議員の先生方にはね、選挙を勝つための顔を選ぶのではなくて、内閣総理大臣を選ぶための選挙、総裁選だということを、もう一度立ち止まって、考え直してほしい。仮に今度の選挙で、若干、議席を減らして政権維持ができたとしても、その後、自

民党は成り立たないと私は思います。

世代交代か、経験と実績か

山口 世代交代は進むのでしょうか。

久米 軸は二つあります。「世代交代」か、「経験と実績」か。その両方がせめぎ合っており、党员の中にも、いろいろ迷いがあると思う。やっぱり世代交代は、聞き心地が良い。一方、齋藤健さんや林芳正さんは、大臣を歴任、党の役員もやっている。そういう人が必要だろう、という世論もある。

街頭演説で、経験と実績を訴える場合、若さと行動力を訴える場合は、それぞれの地域、時代によって違う。今回は、世代交代というのが、一歩リードしているような気がします。やっぱり、経験と実績といってもなかなか世の中がついてこない。しかし、若さと行動力、世代交代も結構なんだけど、あまりにも経験がなさすぎる。危なっかしいですね。

山口 遠藤さんは、全体的な自民党不信の中で、「経験と実績」と「若さと行動力」という論点は、若者層でどう展開していくと考えますか。

遠藤 有権者、特に自民党支持者でない人たちは、「若さと行動力」あるいはこれまでの自民党にはいなかったリーダー像、たとえば女性というところに惹かれるかもしれません。しかし、候補者側は若者層にリーチするためには、何らかのパフォーマンスに、かなり依存せざるを得ない。有権者にはそちらの方が、「うける」。経験がない、頼りないという評価に対して、どう自己プロデュースするのか、運営面での齟齬を隠しきれなかったところにかかっているんじゃないでしょうか。

久米 「世代交代」か、「経験と実績」かと言っても、今度、新総裁になった人は立候補した人を全員、党役員とか閣僚に入れますよね。それがやっぱり世の中の的には、一番、うけやすいものじゃないですかね。ただ、自民党の幹事長と官房長官は、本当の腹心を使わざるを得ません。だって、衆院選をやらせるわけですから。

避けられない裏金問題

遠藤 なんとなく雰囲気が変わって疑似政権交代になるかどうか。これまでの自民党っぽくない人を顔にするなど、総裁選のやり方次第では、次期衆院選において有利に働く、有権者も普通に反応する可能性もあるかもしれません。しかし、この総裁選の間に、裏金問題は避けられない。かといって、候補者同士があまり対立すると、有権者の頭から裏金問題は消えない。過去の自民党、旧安倍派が抱えていた裏金問題の影響は響いてくるのではないのでしょうか。

山口 裏金問題については石破茂さんや、河野太郎さんが「裏金もらった人は公認しない」「お金を返せ」などと発言して、自民党内部では反発が起きている。総裁選は、党员票だけじゃなくて、最後の決選投票は特に、国会議員の票で決まる。今回の自民党総裁選はその意味で、一般の世論と、議員さんの「党内世論」とが、矛盾している。総裁候補になる人は、一般世論と党内世論のどっちに軸足を置くかが問われている。

久米 石破さんの発言や河野さんの発言は余計でしたね。総裁選挙に手を挙げる人は、マスコミから、この発言について聞かれますよ。聞かれたら、否定的なことは言えない。「裏金を認めるのか」となっちゃうから。党内の動きで言えば、とにかくみんな当選したいわけですよ。だから、総裁選の推薦人名簿に「旧安倍派の人はやっぱり載せない方がいいのか」という問い合わせも来るし、「支持するけど名前は載せないでくれ」など、みんな右往左往してます。小林鷹之さんは優秀な人ですが、24人の推薦人中、旧安倍派が11人います。「推薦人に安倍派はいない方がいいよな」という声になっています。だって必ず、推薦者名簿には、「旧安倍派」だと書かれますよ。それをマイナスだと思っている。

大串 裏金問題に対するけじめが、前国会でついていないという問題点がそのまま投影されている総裁選になるのではないかと、と思います。「裏金議員は公認しない」という石破発言は、まさにそこに現れて

いる。私は聞いた瞬間に、即座にXで反応した。公認しないのみならず、その議員の対抗候補を立てるかが鍵だと、書きました。そこまでできるかどうか、というところまで世論が思うほど、裏金問題が大きく残っていると思う。私達も自民党総裁選を非常に注視しています。次の衆議院選挙の争点は裏金問題というのは明らかです。

“派閥”なき総裁選のあとに

山口 今回は、派閥が解散、解体されるという、未曾有の状況の中での総裁選です。だけど、久米さん、派閥は本当になくなったのでしょうか。いざ総裁選となったらやっぱり派閥ということになるのでしょうか。

久米 今回の総裁選は派閥再編、新しい派閥を作るための動きだと思います。みんな、それぞれ推薦人集めをしている。その推薦人が次のグループ、新しい形の派閥になっていきますから、一生懸命、人集めをやっている。

山口 50人を超えるような大派閥から、小グループが割拠する感じですか。

久米 今はもう大派閥を養えるほどの財力を持っている人はいませんし、今の派閥は実質的に会費制です。会費を払って、選挙になると会費分プラスアルファが返ってくるみたいな話ですから。総裁選に向けた“派閥再編”はこれから伸びそうな人が20数人程度のグループを作っている。党の役員人事などに一定の影響を持つ、効果的な動きだと思いますね。

立憲民主 政党の立ち位置は届くか

政権交代の受け皿になる「顔」は

山口 立憲民主党の代表選挙の一番のテーマは何でしょうか。

大串 次の衆議院選挙が目の前です。総選挙は、

政権交代を視野に入れて戦う選挙だ。これが一番の大きな、私達の代表選挙を規定する要素です。誰が代表になるにせよ、国民の皆さんに、立憲民主党が政権交代できる受け皿だと見てもらえるよう、自分たちを持っていけるかどうか。そこが一番大きな代表選のテーマになると思います。

少ない人数で注目されずに終わるよりは、人材がいることを示すため、代表選には多様な人が出た上で論を交わすのがいいと思います。

山口 今回の代表選で手を挙げたのが、泉健太現代表、枝野幸男さんと野田佳彦さん。女性の東京8区選出の吉田晴美さん以外は、あまり代わり映えがしない。新鮮味がないなど批判する声の方が大きかった。遠藤さんは、立憲民主党の代表選については、どういうふうに見ますか。

遠藤 やっぱり、この10年間ずっと見てきた人たちが出てきたという、代わり映えのなさ、は否めない。立憲民主党への支持が広がっていない中、新しい顔が出てこないところに、期待できないと考える有権者もいるでしょう。

ただ、悲観的になるべきではないと思う。これは組み合わせの問題です。自民党の新総裁がたとえば、「若さと行動力」であるとすれば、その未熟に見える人に対して、立民側の代表が非常に重厚な人が出てくれば、対比ができて支持を伸ばせるかもしれない。

山口 立憲の幹部として、代わり映えがしないという批判に対してどう考えますか。

大串 党の代表選や総裁選は、少なくとも3年に1回はある。そのときに次々と世代交代を感じさせるとともに、経験もあるという安心感のある人たちが出てくるように、政党として人材を育てていく。組織的な党の動きも必要だと痛感します。

敵失で政権交代か —裏金批判の目的

山口 自民党で長く選挙をやってきた久米さんの側から見て、野党第一党の党首選びについてはどういう感想をお持ちですか。

久米 結局、自民党がコケなければ、野党は出てこない。自民党の支持率高かったら、いつまでたっても、野党が政権取ることはできません。それじゃ駄目だと私は思っています。

自民党政権が続く中で、いろんな矛盾が露わになっている。例えば、少子化対策がそう。30年も40年も前から言われてきたことです。人手不足の問題もそのままに、今日があるわけでしょう。それに対する不信感が国民の中に蓄積されて、自民党支持率は30%そこそこ、内閣支持率も落ちてしまう。

どうして今の自民党が対応できないのか。「異次元の少子化対策」って、今頃、どういうことですかね。全く成果が出てないじゃないですか。そういう自民党政治の何十年間を総括する。そして、我々だったらこうしますよと、旗を立てる。政策的な対立軸を用意、発信しておくべきだと思う。裏金問題はけしからん、ということばかり言っている。そんなイメージの野党第一党では駄目だって私は思う。

大串 立憲民主党の立ち位置は、自民党と違う政策のセットとして、かなり出来上がったものがあると思っています。毎回の選挙の政権公約も大きくぶれることなく一貫しています。

自民党は基本的に、トリクルダウン理論ののっかって、大企業を中心とする政策を小泉政権、安倍政権と打ってきました。大企業の利益があがれば、中小企業、そして一般市民へとその利益がしたり落ちるんだ、という説明をしてきました。

でも、物価高、賃金が上がらない、年金が削られる、子育てが厳しいというのが現状。だから裏金問題は、やっぱりしっかり言っていかなきゃならない。大企業から、企業献金をもらい、パーティー券をかなり買ってもらうわけじゃないですか。そうすると、企業からの声に、どうしても政治的、政策的に引きずられるからです。

そのような政治を変えていこうという意味で、裏金問題への対応は、立民の非常に象徴的な立ち位置なのです。裏金問題は、しっかり言っていかなきゃならない。大企業から金もらって、その顔色だけ見ていくわけじゃないんだと。1人1人の労働者、生活者、消費者、納税者の人たちを見て我々は

きちっと地道にやっていくんだ。それしかないと思います。

私は民主党、民進党、立憲民主党時代から、選対企画に携わってきました。わかりやすいメッセージを届けることの大切さ、難しさは身をもって感じています。2009年の「政権交代」というフレーズ、あるいは「国民の生活が第一」、あるいは「コンクリートから人へ」。人をベースにやっていこうという立憲民主党の政策セットは揺るぎないものがある。ただそれをどう、わかりやすく言い表すのか。自民党とは違う立ち位置でやってきたのだ。それをぱっとうけなくても、地道に訴え、やり続けることが非常に大切だと思っています。

自民党政治への決着を

山口 私も久米さんと同感です。小沢一郎さんが動いて、野田さんを擁立する。あるいは枝野幸男さんがもう1回やると手を挙げる。大いに結構です。若けりやいいってもんじゃない。彼らの思い、「政治改革大綱以来改革を唱えながら、自民党は金権体質にあと戻りじゃないか」「このままじゃ死んでも死にきれん」という思いを言えればいいと思う。世代交代はちょっと置いて、「最後のご奉公」というときに、久米さんが言われたように、自民党政権がやったふりをしてごまかしてきた問題をきちっと取り上げて、決着をつけるということだと私も思います。

大串 ぜひそのような課題で、これだったらいけるというのがあったら、教えていただきたい。アドバイスをいただきたいと思います。

久米 一つだけいいですか。今、大串さんが、自民党と大企業との関係を指摘された。でも、私から言わせると、立民と連合との関係はどうなのか。1支援団体の連合会長に、共産党との選挙協力はけしからんと言われて、易々と受け入れるのは駄目ですよ。「ふざけるな」って言わなきゃ。連合は政党の支援団体じゃないですか。自民党は、例えばトヨタ自動車、あるいは経団連に何か言われて「はいはい、申し訳ございません」と言ったことなど、一度もありません。立憲民主党は、もっと毅然とした態度を取

らなければ、駄目だと私は思いますね。そうでなければ、政党としての、立ち位置がないですよ。

大串 選挙をどう戦っていくか。しっかり私達の立ち位置を確立していきたい。自民党の今の政治に対して不満を持った人たちをより多く幅広くまとめていくことは難しい仕事ですが、選対委員長として、日々考えています。全力を尽くしています。

私は、2007年の希望の党の代表選に出たことがあります。玉木雄一郎さんと争いました。結果、負けましたが、そのとき、私自身はもう一度、統一会派、連合を軸とした流れを作っていかなきゃならないという思いでいました。そのときと比べると、政策のセットもかなり出来上がり、立憲民主党として、野党第一党の立場も作っています。今度の代表選は大きな路線の対立を呼ぶような選挙ではありませんが、次の総選挙に向けて、政権を狙える政党として見てもらえるようになること。代表選ではそれが問われるんじゃないか。

衆院選と政権の見通し

自公に勝つための プラスアルファが見えない

山口 新しい総理大臣が決まると、次は解散総選挙になるというのが大方の見方です。9月27日に総裁選をすると、10月初旬に、臨時国会を召集、首相を決める首班指名選挙を行います。その後、組閣があり、首相の所信表明演説、野党幹部による代表質問という流れ。そうすると、総選挙は遅くとも、2024年の年内になりますよね。

久米 誰が自民党総裁になるかによりますが、新総裁の人事によって支持率がどれくらい回復するかですね。政党支持率が回復傾向に向かっても、総選挙での投票に結び付くかどうかは、予測できません。私の経験から言えば、自民党支持者だと言う人で実際に自民党に投票する人は7、8割です。今回もそんなに変わらないと思うんですよ。

遠藤 自民党が新政権になれば、支持率が一定程度、回復すると思います。日本維新の会も、今は勢いが失われ、支持率は低下しています。この中で、立憲民主党を中心に、野党がどれぐらいまとまるか。これまでの野党共闘の枠組みで言えば、立憲民主党と共産党の支持者を合わせたぐらいの票は出てくるでしょう。でも、自民・公明に勝つためのプラスアルファの票が見えない。

野党共闘が繰り返されると、「立憲共産党」というネガティブなとらえ方が広がる可能性もある。だからといって、立憲民主党はもう少し右よりだということを、左に止まってないんだってところを、アピールして票を取りに行くのも難しい。結局、勝敗が不透明な選挙に終わると思います。

選挙区調整と野党協力

山口 大串さん、立憲の候補者擁立と選挙区調整はどこまで進んでいますか。

大串 泉代表は、200の小選挙区候補を擁立する方針です。現在、190人まで候補者擁立が進んでいます。あと10人程度ですが、選挙までには200を超えたいというのが私の思いです。選挙区の調整は、国民民主党と一定程度の理解を得ながら、すみ分けをしています。社民党ともすみ分けをしているところもあります。過半数を狙えるところまでの擁立をしっかりとやっていける素地はあると考えています。

政権交代の受け皿となりうる規模を持つことは大切だし、野党の中でもここは立憲民主党しかできないことです。

山口 問題は野党協力の形をどう構築するかという点だろう。枝野さんは従来の野党協力はもう見直すべきだと言っている。野田さんは共産党とは一緒に政権をつくれなと言い、むしろ維新との協力に言及していますね。

大串 各野党が連携し、「自民党の議席を一つでも減らし、野党の議席を一つでも増やす」。これを1年以上、言い続けてきた。これが全てだ。連携は、それぞれの立ち位置や地域的な事情もあり、簡単なことではないが、各党の選対委員長なり、幹事長な

り代表も含めたところで一つ一つ解決していくしかないと思います。

山口 その場合はやっぱり維新もその各野党の内に入るのですか。

大串 維新の皆さんとも、話をします。けれども、維新の皆さんの方が、私が言う意味での各野党で連携して力を合わせていきましょうという枠組みには入られる気持ちはないように感じています。

私達は200近く候補者を擁立しますが、共産党とは80ぐらいの小選挙区で重なり、維新とは100以上の小選挙区で重なっています。維新と選挙区が重なった場合、立民の票がぐわれているのか。そういう分析も冷静にしつつ、どうすれば野党全体で議席をマックスにできるかを一つ一つ解決し、実行していきたい。

補選で見た野党共闘への教訓

久米 選挙というのは、自民党に入りたいか、入れたくないか、という面がある。つまり、今の政治に満足なのか、不満足なのかということ。自民党に入れたくないという人にとっては、いっぱい政党があれば、分散します。野党共闘は必要だと言っています。

山口 私としても野党協力、野党共闘については思いがあります。私自身、市民連合という運動を始め、野党協力について、旗を振ってきた1人です。けれども、今度の衆議院選挙に向けては、共産党を含めた政策合意に基づく野党共闘は無理だし、しない方がいいのではないかと考えています。

4月の三つの衆院の補欠選挙から教訓を得ました。東京15区は、共産党が前面に出て、リベラル、左翼政党に共感する市民と、共産党と立憲民主党が協力して、混戦を勝ち抜いた。そういうパターンの選挙区はほかにもいくつかはあるかもしれません。

一方、長崎2区、島根1区は、共産党は候補者を出さず、静かな連携をした。保守層にも強い山田さん、亀井さんが勝った。地域ごとに勝てる枠組みをそれぞれ作っていく以外には答えがないんじゃないか。そう考えるようになりました。

大串 地域の違いもあれば、地域での政党間のあ

り方も違う。補欠選挙では長崎は維新に勝ち、島根では自民、東京15区は自民が擁立できず維新に勝った。結果、3勝となりましたが、そこに至るまでに相当の努力があった。いろんな立場の人がそれぞれ働きかけ、態勢を作った。ああいう連携、戦い方に持っていくことが党本部の責任だと考えています。

やはり自民党中心政権か

山口 今度の衆院選では、自民党は逆風の中、自公あわせても過半数割れという事態も想定されます。自民党が第一党である状況は変わらないままに、維新、国民民主との連立という方向になるんでしょうね。

久米 そうなるでしょう。立憲民主党が比較第一党になる可能性はあるかもしれませんが、過半数をとることはまずない。立憲民主党が共産党と組むこともありえません。自民党を中心とした政権は変わらないですね。

大串 私達は2月の党大会で、次の選挙に向けて、野党第一党じゃなくて、全体での第一党を目指すことを目標にしました。何とか達成したい。しかし、達成した後は政治の世界ですから、不透明です。国民の意思が、自民党を減らし、立憲民主党を第一党とするような流れにあるとすれば、その世論を受けた選挙後の態勢作りも行われるべきです。野田さんが言う野党連携というのも、選挙の後にどういう組み合わせを作るかということだと、私は受け止めています。結果を出して世論にこたえられるような態勢作りをしていくのが、政治家の役割だろうと思います。

無党派層に食い込む

大串 無党派層にどこまで食い込めるか。それが次の選挙で問われると思います。私達が従来、支持を得てきた人たちを含めて、しっかりと支持を得ていく態勢を組むこと、そしてメッセージを届けること。つまり、それは自民党の政治を変えてほしいとい



う声をしっかりと受け止めることだと思うし、皆さんから立民が受け皿だとみなしてもらいたいということです。

遠藤 無党派層にどう食い込むか。その方法が分かれば、どの政党もやっているだろうという、すごく難しい話です。社会のネットワークが切れているところで、従来のように地元の組織に政治家の先生が来て話を——といったことだけではもはや機能しません。

社会構造が変化している中で、政党だけで無党派層を変えることは難しいです。でも、新しいことはできる環境にある。それこそネット選挙運動を通じてネット上で繋がることはできる。支持者を囲い込む形から、支持者以外にも開かれたアプローチをする方法を見つけていく。そうして自分たちの存在を知らしめる手段を模索する段階にあると思います。しかし、一気に火がついたとしても、「儚い」ものに終わることもある。石丸現象もそうなる可能性があります。だからこそ、大串さんが強調されるように、地道にやることがセットになる。人と会う、会って仲間を増やしていくことも重要になると考えます。

久米 私の住む町では、駅頭でマイクを握っている地方議員は共産党だけです。選挙になれば他の党も出てきますが、普段の平日に、マイクを握っているのは共産党だけ。その真面目さにびっくりする。いつ

も立っている、いつも訴えている、いつも行動している。そういう真面目さを有権者は、信用、信頼する。だから野党にしても、基礎票以外のものを取るためには街頭に出たり、いろんな陳情を聞いたり、それがやっぱり必要じゃないですか。インターネットも結構だけど、インターネット見てもらうまでがたいへんなんです。

衆院選でも同じです。この人だったら間違いないと、思ってもらうまでが重要です。特に自民党は支持者に大きな変動があるわけだから、野党の人が、自民党の支持者からどれだけ多く引っ張ってくるか。どこまで固められるか。だから野党の人だって、そこにがんと踏み込んできた人は強い。小沢一郎さんにしたって、岡田克也さんだって、自民党支持者を食っている。大串さんもそうだ。自民党に来てもらいたい——と言いたくなるほどだ。

政治への不満をつかまえているか

大串 次の大きな選挙は、衆議院選挙なので、立民に投票すれば変わっていくのだ、という期待を持ってもらえるような状況を作っていきたい。若い方から、自分が投票に行っても何も変わらないから投票には行かないという声をよく聞きます。投票すると変わるんだという流れを見える化すれば、投票

に行こうという気持ちが出てくるんじゃないか。野党の責任は大きいと思っています。

衆院選までの時間は限られている。その限られた時間でできることも限られる。けれども、立民に投票すれば変わっていくのだ、という期待を持ってもらえるような状況を作っていきたい。自民党とは違う私たちの政治。それを訴えてきた効果は現れてくると信じ、前向きに臨みます。

山口 地方議会にもどんどん候補を出して、地域で支持者を作り出すこと。そして、基本に、古典に帰るべきだと思います。立憲民主は労働組合にもっと関わるべきです。特に、学校や保育、介護施設、病院で働いている人たちの窮状を何とか救う。国民生活を支えるという具体的な道筋を示すことです。

大串 そうですね。魔法の杖があるわけじゃないからこそ、地道にという選択肢は重要です。どこかで着火点があると思う。

久米 そうそう、現状に対してね、不満なのか。満足なのか。そこに訴えることです。無党派層は、政治に対して不満を持っている。だから、怒っている時には、投票に行くんです。

昭和の時代、総選挙の投票率は75%ということがあった。自民党の支持率が60%です。野党の支持率は全部足しても20%、残りの20%が政治的無関心層と言われていた。それが平成に変わった時に、投票率も下がり、自民党の支持率は半分に落ち込んだ。その人たちがどこへ行ったかという、政治的無関心層や、それと一緒にの無党派層だ。

無党派層の場合、実際に投票に行く人は半分程度です。でも、消費税の導入の時、安倍さんの第二次政権のときには無党派層が投票した。無党派層に対して、いろんなテーマを出すことで、野党側に向くこともあれば、自民党側に来る可能性もあるわけです。ところが、今の政治は、無党派の不平不満を引き出し、代弁するということもしないし、積極的に投票に行かせるだけの希望も与えない。与野党のリーダーは有権者に訴えるべきテーマを作り出してもらいたい。

2024年秋 日本政治の展開

危機への対処なき政治

山口 東京都知事選を経て、自民党総裁選、立民の代表選が行われる。その後、衆院選とめまぐるしい。自民党は変わるのか。日本の政治は変わるのか。久米さん、自民党の未来はまだ大丈夫ですか。

久米 自民党は、人材の砂漠だって私は言っています。そのくらい、人材がいなくなった。この問題は自民党だけじゃなくて、他の政党にも共通して言えることなのでしょう。だけど、もっと深刻なのは、自民党から、政治にとって一番必要な危機に対する対処と、将来に対する展望が出てこないことです。

今、目の前には様々な危機が押し寄せている。一昨年のロシアのウクライナ侵攻によって、エネルギー危機、食料危機、戦争の危機が目前に迫っている。それに対して、政府は、政治は答えるべきです。ところが、たとえば南海トラフ大地震が起こるといわれながら、気象庁が1週間要注意と出しただけで、政府が何をするという話は出てこなかった。スーパーの店頭で米がなくなったという事態に、ようやく8月27日に坂本農水大臣が「新米の流通が始まる。冷静な対応を」と言う。その程度ならみんなやっていますよ。米一揆、米騒動くらいみんな怒っている。ところが政府からは何の回答も出てこない。

未来への展望も出せていない。5年後、10年後にはこんな社会を作りますよという、その展望が人々の暮らしにも直結していない。それがね、政治不信の表れになっていく。これでは将来を自民党に任せようという有権者の積極的な投票行動は起こり得ないと思います。危機に対する対処と将来に対する展望を示す人を、自民党の中で作っていけるかどうか。それが一番の課題だと思う。

自民の足場は崩れた

大串 自民党政治の足場はかなり崩れている。自民党の本質はやっぱり大企業の執行部との繋がりが強すぎるのだ。金を集め、これまでは票も集まったのかもしれない。しかし、そこに重きを置きすぎたがゆえに、多くの一般の有権者からかけ離れてしまった。

だから、物価対策に対して、非常に手拔かりが多かった、動きが遅く、米の問題も現場感覚と相当離れた対応になってしまった。生活者、納税者、働く者、消費者を重視する私たち立民との違いは歴然としている。これはもう揺るぎのないもので、絶対に自民党とは違う対抗軸を作ってきたつもりです。維新のように第2自民党だと自称し、連立交渉があれば乗るかもしれないということはありえません。

1回の選挙で全てを成し遂げることはできないかもしれません。しかし、自民党の支持基盤が崩れていく中で、2回、3回と選挙を経ていくうちに、足場ができ、人材が育ち、必ずこちらの支持基盤を確立できると確信しています。そうならないと日本は非常に厳しい状況に追い込まれたままになってしまう。私は前向きに頑張っていきたいと思います。

民主主義を成立させるために

山口 都知事選、そして自民党総裁選と立憲民主党の代表選を通して、遠藤さんは今後の政党の課題はどこにあると考えているのだろう。

遠藤 私たちは、自民党支持、立憲民主党支持という、政党単位でどうしても語りがちです。しかし、有権者はそんなにきれいに分かれてはいません。現

在、無党派層はおよそ半数を占めています。また、政治的に関与しなかった、政治に関与したくない、面倒くさいからやりたくないという人たちが約50%いる。これでは民主主義が成り立たない。だから、民主主義を成立させていくという意味でも、無党派層や政治に関与したくない、やりたくないという人たちをどれぐらい、関わらせていくことができるか。これが重要な課題となっています。

そこに着火できる人が、もしかしたらいるかもしれないというのが、今回の石丸さんだったわけですよ。つまり、保守でもリベラルでもない、改革志向を感覚として打ち出した人を旗印にして、そうした層がつながっていく。今回、維新が都知事選に立てなかったのも、その層の票が石丸さんに流れたという見方もできますが、やはり無党派層が投票にきた結果、従来の政治の枠組みから見ればよくわからない動きになった。そして、全然考えてなかったことが起きた。

もう一つ、政党の世代交代だけでなく、有権者、支持者の世代交代も重要な課題です。自民党も、立憲民主党も年代別の支持率の格差が非常に大きくなっている。特に立憲民主党の場合は、若年層の支持率が非常に低く、このままだと10年後、政党がなくなってしまうのではないかと、というぐらいの低さです。総裁や代表を若い人にするかどうかという問題とは別に、経験のある人たちが、若い層を一生懸命育てて、自由にやらせて支援することが必要です。これは与野党どの政党でもです。自民党の総裁選、民主党の代表選を通じて、これら課題への取り組みが急務であると気づくことになるでしょう。

山口 皆さん、ありがとうございました。

(2024年8月30日開催、於：参議院議員会館)

